

平成27年度岡山ESD推進協議会

岡山ESDプロジェクト重点取組組織活動報告書

事業名 ポスター展示企画～児島湖・児島湾・瀬戸内海の窒素循環と生きものたち～

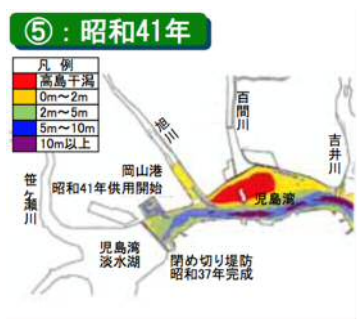
団体名 旭川源流大学実行委員会 担当者名 吉鷹一郎

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）



2016年5月～10月「高島干潟の生き物調査」および8月～1月「児島湾沿岸でのシカメガキ生息状況調査」を毎月定期的実施した。この結果、干潟のチワラスボやア



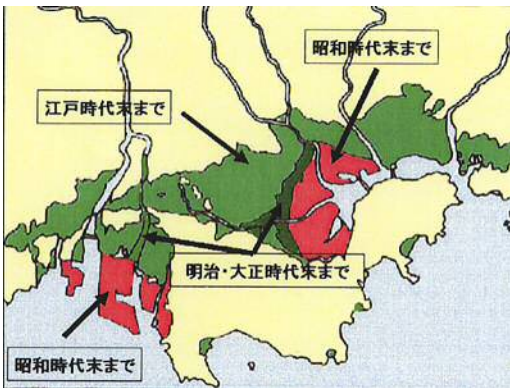
ナジャコなどの大型ベントス生物の生息密度などが測定され、同時に片翼だけになっている高島干潟の東側面積が徐々に減少していることも明らかになった。調査期間中に2回の干潟観察会を地元の公民館（7月29日操南公民館主催 60人）やNPO団体（8月12日おかやま環境ネットワーク 30人）と協力して企画運営した。いずれの観察会でも事前にスタッフによって主な生きものを採集して生態展示を行い説明したが、参加者によって多くの魚類や甲殻



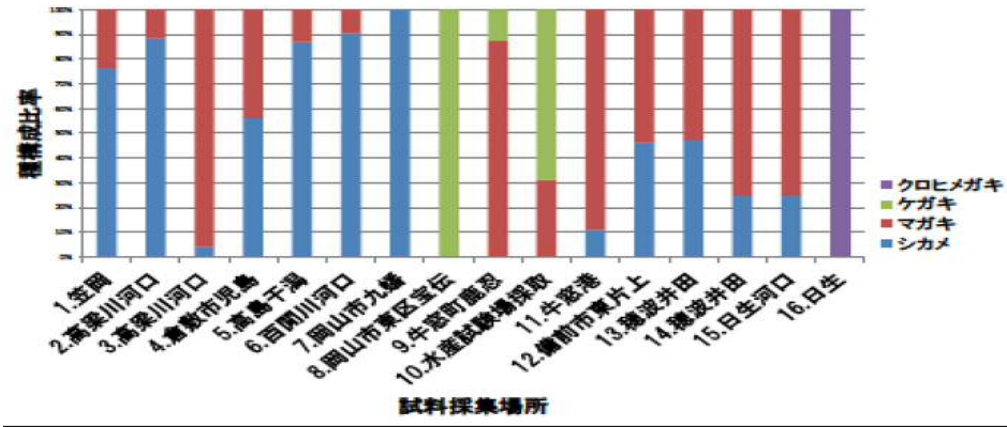
類・貝類の生息が確認され干潟の役割の重要性を参加者に理解して頂いた。このために現場で持ち歩ける簡単なパネルやパンフレットが有効であることが分かり、NPOによる協力で作成の運びとなった。ポスター展示は操南公民館と光南台公民館において2月下旬から3月下旬まで展示予定で、2月27日には「水環境フォーラム」において児島湾の窒素循環の解明にむけて、国・県・市の水質の専門家の講演と討論会が行われる予定で進められているところである。



2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ



瀬戸内海沿岸の海苔色落ち問題に見られるように海域の無機態窒素分の貧栄養化が指摘されながらも、一方では児島湾・児島湖での有機態窒素分の富栄養化が依然として解決されていない現状がある。明治大正昭和と継続的に大規模干拓される以前の児島湖・児島湾は「吉備の穴海」といわれた「豊穡の海」であった。豊かな生態系を持つ広大な干潟・浅瀬・藻場では、多くの回遊魚の産卵場として稚魚の育成場として重要な役割をはたしていた。「里海」として今でも世界的に生産量の高い瀬戸内海であるが、瀬戸内海中央部の備讃瀬戸海域での貧栄養化は漁獲量の低下や海藻成長不足などの問題を引き起こし将来の環境悪化を惹起している。「里海」の持続的な活躍を支える「陸域から供給される窒素分」を確保するには、有機態窒素の無機化を促進している分解者の多く生息できる「浅瀬」「干潟」「藻場」は極めて価値が高い生態系（海のバイオーム）と考えられる。しかし、我々の里海を生産量を支えるこの貴重な生態系は現在「瀕死状態」と言っても過言では無く、緊急な保全措置や再生措置が求められている。このことから昨年「瀬戸内海臨時措置法」が改正されて「きれいな海づくり」から「きれいで豊かな海づくり」に方針転換されて、「干潟」「藻場」「浅瀬」の保全と回復措置がうたわれたところである。この度の「ポスター展示企画」は市民に広くこのことを知らせる意味を持っている。「高島干潟生き物調査」や「児島湾のシカメガキ生息調査」などによって得られた若干の知見も含めて将来の豊かな海の復活の希望のシンボルとして紹介した。児島湾の生き物には有明海との共通種で昔の東シナ湾の遺構種の存在が確認され環境教材にも適している。



児島湾に生息していた生物(有明海との共通性)

絶滅:二枚貝類 ハイガイ・アゲマキ・クマサルボウ  
 腹足類 シマヘナタリ・クロヘナタリ  
 多毛類 アリアケカワゴカイ


絶滅危惧I類:腕足類 ミドリシヤミセンガイ  
 甲殻類 シオマネキ

絶滅危惧II類:甲殻類 ヒメケフサイソガニ  
 二枚貝類 コオキナガイ(ウミタケ)  
 魚類 タビラクチ


準絶滅危惧:二枚貝類 タイラギ・シカメガキ  
 魚類 トビハゼ

その他:腹足類 ゴマフダマ・サキグロタマツメタ  
 二枚貝類 サルボウ(モガイ)(有明海から)  
 魚類 コノシロ・サツパ・メナダ・ヒラ  
 頭足類 ベイカ  
 甲殻類 アキアミ・シバエビ・ヤマトオサガニ・ガザミ


赤字は、現在も児島湾で生息が確認されている種




チワラスボ(絶滅危惧II類;  
絶滅危惧IB類)



キセルハゼ(絶滅危惧I類;  
絶滅危惧IB類)



ヒメケフサイソガニ  
(絶滅危惧II類)



ハクセンシオマネキ  
(準絶滅危惧;絶滅危惧II類)

### 3. 取組の成果 (参加者の変化、感想など)

高島干潟観察会と理科大学の協力による生き物調査は2008年以来毎年継続している。年に2-3回の調査で毎回55-75種を確認、これまでに、生息確認種が2015年4月現在114種類である。その中の絶滅危惧種は、岡山県によるカテゴリーでは絶滅危惧I類2種、絶滅危惧II類8種、準絶滅危惧7種、合計17種。環境省によるカテゴリーでは絶滅危惧IB類2種絶滅危惧II類4種、準絶滅危惧12種、合計18種が確認されている。

観察会の参加者は、2008年～2011年までは中学高校の生物クラブの生徒対象で環境教育の一環として行ってきたが、2012年から地元の公民館やNPOとの協働企画で市民参加型の観察会に変化している。参加者の感想は「参加してみてこんなにも生き物が多くいることに驚いた」「高島干潟は子どもに身近な自然を見せるために非好感されている。地元の漁協や町内会の協力も得て、2008年から継続的に実施している。2009年には中区の「ふれあいセンター」大ホールで「高島干潟は今どうなっているか～現場からの報告」と題して、2008年からの高島での生物・考古学の総合調査のポスター発表と生きものの生態展示が行われ地元選出の国会議員も含め約100名の参加者が参加して「昔の豊かな干潟を取り戻したい」「児島湾の自然を再生して欲しい」など意見を確かめた。今年の児島湾の生き物たちの姿を伝える公民館巡回ポスター展示企画と専門研究者による「児島湾の窒素循環を考える」水環境フォーラムの特別企画は2月後半の実施に向けて準備中である。

### 4. 今後の課題と展望

この延長線上には、有明海や中海など広大な汽水域を持つ地域で起きている「海の窒素循環を人為的に調節する」という新しい動きを児島湾でも検討できればと期待している。

＜岡山ESDプロジェクト重点取組組織助成金＞

(様式C)